

学習者の作文コーパスにおける認知的モダリティ —母語話者との比較—

木下りか

武庫川女子大学

kishita@mukogawa-u.ac.jp

1. はじめに

本発表は、「蓋然性」を表す認知的モダリティ形式（ようだ、らしい、だろう、かもしれないなど）の習得上の問題について考察することを目的とし、中国語を母語とする中上級の学習者と母語話者の意見文の比較分析を行う。

認知的モダリティの習得研究には、大島(1993)、佐々木・川口(1994)、山森(2004, 2006)、伊集院・高橋(2004, 2010)、李晨(2007)などがある。考察対象は会話文、テーマ作文、意見文など異なるが、そこで指摘されているのは上級学習者であっても認知的モダリティの習得が進まないこと、また「だろう」と比べ、証拠に基づく認識を表す形式（ようだ、らしいなど）の使用頻度が低いことである。

上級学習者においても習得が進まないことは、認知的モダリティの習得の困難を示唆する。先行研究では主として量的な分析が行われているが、誤用や使用回避の問題を具体的に把握できれば、教育に生かせる可能性が生じる。そこで、本発表は、意見文について質的な側面を中心に分析を行い、誤用の種類とその原因、非用の場合は、それが意見文作成上、どのように問題なのか、という観点から考察を行う。

2. 分析対象

コーパス：伊集院郁子「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」（2011年）
「インターネットが自由に使える時代に新聞や雑誌は必要か」というテーマで意見文を作成（800字程度、辞書不使用）。学習者は後に母語の意見文も作成。

データ：①日本語を母語とする大学生（134名のうち57名）
②台湾の大学の学習者（日本語能力試験2級 学習時間600時間相当以上、57名）

対象形式：認知的モダリティ形式：ようだ、らしい、かもしれない、にちがいない、だろう
思考動詞：「思う」（「[非過去、非否定、「思う」の一人称主体の省略]といった条件の元でモダリティ形式化」仁田1991：58）

3. 量的分析

1) モダリティ形式と「思う」との使用数の比較（学習者と母語話者との傾向の相違）

学習者：モダリティ形式の使用例：62 例、「思う」の使用例：171 例

母語話者：モダリティ形式の使用例：134 例、「思う」の使用例 84 例

2) モダリティ形式の種類別の使用数の比較

モダリティ形式に限って見るならば、学習者も母語話者も「だろう」の使用頻度が圧倒的に高い。意見文作成上、重要な役割を果たすのは「だろう」であると考えられる。

以上 1) 2) を踏まえ、使用頻度の高い「だろう」に見られる誤用（4.1 節）、モダリティ形式の非用、すなわち「思う」の他にどのような形式が不確かさの表現に用いられているか（4.2 節）、という二つの視点から分析していく。

4. 質的分析

4.1 「だろう」に見られる誤用

1) 平叙文の場合（「だろう／のだろう」に関する誤用）

(1) a. ??その何種類の製品の中に、一番の便利さが持っていて、生活を影響するのはコンピューターだと思う。今は、何でもコンピューターでできるんでしょう。(TM001)

b. 認識の根拠：既存の知識

(2) a. ??及び、紙の触感は何より、どこでも読めるもその利点である。また、皆はパソコンが使えるわけがないのだろう。(TM055)

b. 認識の根拠：既存の知識

(3) a. ??昔にひきかえ、今の文に間違っただ文字が数少なくないある。読み直ることが粗末に取り扱うだらう。(TM051)

b. 認識の根拠：(読み直すことを粗末に扱う⇒間違っただ文字が少なくない) のだろう。

(4) a. ??形があるからこそ、読者はそれらを通じてニュースとかの情報のみならず、同時にデザインのある物さえも楽しめるだらう。(TM040)

b. 認識の根拠：(形がある⇒デザインも楽しめる) のだろう。

2) 疑問文の場合（①非用による強い印象 ②「だろうか／のだろうか」に関する誤用）

(5) 新聞や雑誌などを抜けば、うちの両親はどうすればいいのか。(TM055) [①非用]

(6) でも、それで、インターネットは出版品の代わりになれるのか。(TM003) [①非用]

(7) ?? (前略) その人たちはどうしてニュースを知っているか?。(TM023) [①非用 ②「のか」]

(8) ??今、インターネットは多く使用され、いろいろな情報は速く広く世界の隅まで届くようになった。だからといって、新聞と雑誌はもう必要がないというのは正しいでしょうか。

(TM041) [②「の

以上のように、平叙文・疑問文に共通して、推論の方向性（「だろう/ のだろう」）に関する誤りが散見される。また、「だろうか」の非用により、暫定的なものである可能性がある認識（「だろう」で表される認識 木下：2013）に疑問を呈し、思考が進む過程を提示する機能が有効に働いていない。

4.2 モダリティ形式の非用

4.2.1 認識の不確かさの表現

1) 非用を目立たなくする表現（1）—多様な回避の方法（母語の転移／活用）

(9)「断言できません」(TM044-11)、「予測できない」(TM036-20)、「はっきり言えません」(TM043)

(10)??また、インターネットによって提供された情報の正確性も一つの疑いです。(TM018)

(11)??だから、新聞や雑誌からの情報は正確性が高い。(TM011)

(12)??「ネットができて新聞や雑誌はもういらぬ」という声もときどき聞こえる。(TM012)

2) 非用を目立たなくする表現（2）—不定の主語を用いた表現

(13)そういった理由で、多くの人は新聞と雑誌など、「古い」メディアはもう必要がないと主張している。(TM029、「*」コーパス原本に注釈なし)

(14)今の社会では大勢な人達は一日中パソコンに向けて仕事をしている。(TM014)

(15)ある人達はどうしてもインターネットを使うのがおかしいと思う。(TM011)

母語の直訳と思われる「多くの人は～」「ある人は～」など不定の主語には「蓋然性」が含まれ、強い主張が回避される。一方、類似した内容を母語話者は特定の人の存在や多寡として表現する（(16)～(19)）。この場合、存在や多寡の判断性が強く出るため、当然そうだと言えない場合には何らかの形で「蓋然性」を表現したほうが適切である。

(16)高齢者の中にはインターネットを使いこなせない人が多いと思う。(JP005)

(17)新聞や雑誌を買っても全ての記事を読む人は少ないだろう。(JP010)

(18)情報を入手できればそれ以上のことは必要ない、と考える人もいるだろう。(JP016)

(19)（前略）パソコンの操作を難しくて覚えられないという人たちもいます。(JP011)

4.2.2 主張（価値判断）の不確かさの表現

「新聞や雑誌」の必要性を主張する文において、学習者の場合、言い切りの形がよく使われる（53 例文中 35 例：66%）。これに対し、母語話者の場合、「包括形式（思考動詞や他のモダリティによって包み込んだ形式）」（伊集院・高橋 2004）が圧倒的に多い（59 例中 56 例：95%）¹⁾。ただし、母語話者の表現法はさらに多様で迂言的な場合が多い。

(20)（前略）不必要だと言うことはできないと思います。(JP009)

- (21) (前略) 必要であると結論づけたいと思います。(JP009)
- (22) (前略) (新聞、雑誌) は必要ではないとはいいきれないと考えます。(JP020)
- (23) 以上の点から、これからも新聞や雑誌は必要であると私は考える。(JP006)
- (24) (前略) 新聞や雑誌が必要とされる理由は大いにある、と私は考える。(JP021)

5. おわりに

意見文では「だろう」が重要な役割を果たす。「だろう」に関してよく見られるのは、「だろう」と「のだろう」との混同である。これは因果関係における推論の方向性(木下 2013)に関連した誤りであり、「ようだ」など証拠を表す類と「だろう」など蓋然性を表す類との対立を決定付ける要素の一つである。先行研究で指摘されるように、上級でも認知的モダリティの習得は進みにくい。推論の方向性の対立に関する理解が有効に働く可能性がある。

また、認知的モダリティの非用が読み手に違和感をもたらす場合としては、疑問提示文、主張文(価値判断の表示)の場合などがあげられる。しかし、母語からの直訳がある種の不確かさの表現として機能することで、非用が表面化しにくい場合もある。意見文作成の指導においては、この点も踏まえた指導が有効だと考えられる。

注 1) 言い切りの3例のうち、2例は譲歩付である。

参考文献

- 伊集院郁子・高橋圭子(2004)「文末のモダリティに見られる“Writer/Reader visibility” 中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』123号 pp. 86-95
- 伊集院郁子・高橋圭子(2010)「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ—日本・中国・韓国語母語話者の比較—」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター紀要』pp. 13-27
- 大島弥生(1993)「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81号 pp. 93-103
- 木下りか(2013)『認知的モダリティと推論』ひつじ書房
- 佐々木泰子・川口良(1994)「日本人小学生・中学生。高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84 pp. 1-13
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 山森理恵(2004)「KY コーパスにおけるモダリティの使用実態」『南山日本語教育』11号 pp. 247-267
- 山森理恵(2006)「認識のモダリティの使用について—日本語学習者と日本語母語話者の使用の比較を通して—」『東海大学紀要 留学生センター』26 pp. 73-85
- 李 晨(2007)「中国語母語話者の日本語作文におけるモダリティ表現について」『語学教育研究論叢』24号 pp. 239-249